千二百萬と見てゐるのは妥當であらう。

第二部は人口增減の研究、就中、歐洲の人口傾向の一權威である著者が近代の人口增加、並びに大戰後の人口停滯について縱橫に論じたものである。一七七〇年以來の增加は主として死亡率の減少により說明されてゐるが、此れとても通常の概算死亡率によつて示される程大でない。かゝる樣相を呈する所以は乳幼兒死亡の減少、長壽者の增加に基づくものであるが、將來とも、平均年齡が八十歲に達する事はないとしてゐる。マルサス以來の過剩人口に對する恐怖が生んだ急激な人口增加の原因を多產にありとする通俗的意見にも、死亡率の解剖と同樣に年齡構成の分析から出發して批判を加へてゐるが神話的な俗信が錯覺(optical illusion)と結合して John Grant 以來 W. Winkler に至るも尙、統計學者中に見出されると云つてゐる。fecundity（生產能力）が文化と共に向上するかせぬかの問題も興味はあらうが、重大な事は此が fertility（受胎率）として如何に現れるか、受胎率の現狀は如何かである。著者は白人居住地域を三型に分ち、現在の母性（十五—五十歲）と未來の母性との比較より見て西北歐に於ける出產力の低下を注意してゐる。

第三部では、かかる人口減少の傾向に對する社會的、政治的手段による人口增加策にふれ、ドイツ、イタリーの失敗を統計上より論じ、避姙法の流行とその社會的、經濟的背景を示す。併し、かゝる大革命が經濟機構の變革を伴はずして起つたものであり、世界の產業機構が人口增加を目算に入れて經營されてゐる現況は人口が現在の出生、死亡率により推移するならば將來人口減少を來たす事を全く無視した冒險であるとするのは些か白人中心、就中、英帝國に忠にすぎはしまいか。とは云へ、子供を持ちたくない、子供が失業者を作り出す、と云ふ世上の意見が近來の人口現象の根幹をなしてゐる事は否定し難い。そこに人口論の動搖があり、人口政策が華かな脚光を浴びて國策の第一線に登場した所以がある。最後に、附錄には世界各地の資料を種族別に豐富に擧げて居り、人口研究家に取つて多大の便宜を與へてゐる事を特記して置きたい。(Oxford; 1936. Price 5 S.)〔伊藤〕

ジヨン・ロツシング・バツク編
支那の農業

鹽谷安夫
仙波泰雄 共譯
安藤次郎

我が國と支那との關係は、同文同種、唇齒輔車、離るべからざるものと云はれながら、とかく圓滑を缺き、遂に今次の事變となつたが、支那の社會・經濟の現狀に關する認識が、著しく不足したことも、殘念ながら認めねばならぬ。

これに對して、北米合衆國からは、多數の有能な學者が出て、多方面に亘り、支那に關する實證的研究を進めた。これは、支那と合衆國とが自然事情に於いては多くの類似性を示しながら、社會的には、新開國と舊國、餘裕ある國と人口過多なる國、世界最高の生活程度と飢餓線一杯と云ふ風に、極端な對照を示し、驚異

の塊を支那に見出した爲でないかと思はれる。

この種數多くの研究中、バック編纂の支那農業に關する標記の書は、廣汎な分野を、各方面から、バックを始め多數研究者が、分擔分析した結果の集大成であつて、量・深さ何れの點からも、代表的なものと云つてよい。編を分つこと五、曰く支那の農業並に農業地帶、外的諸要因、人間による土地の利用卽ち農業經營、農産物の販賣とその價格、人口、生活水準、章を分つこと十五である。

その根幹をなしてゐるのは、バックが、前著「支那農家經濟研究」で試驗濟の方法により、莫大な費用と多數の人とを動員して作製・整理した、支那の農業經營・農家經濟に關する統計である。觀察範圍が前著では、七省、一七地方、二、八六六農家に限定されてゐたに對し、本書では、二大地帶、八農區、二二省、一六八地方、一六、七八六農業經營、三八、二五六農家を含み、分野こそ異なるとは云へ、リヒトホーフェン以後の支那に關する大著である。

從來支那農業に就いては、表面的な概括論か單に示唆的な記述しか存在しなかつたから、本書により啓發される點は、枚擧に隙がない。地理學的に注意すべきは、秦嶺・淮水の線を以て支那を小麥・水稻の二大地帶に分ち、小麥地帶を春麥區、冬麥・粟區、冬麥・高粱區、水稻地帶を揚子江水稻・麥區、水稻・茶區、四川水稻區、水稻二期作區、西南水稻區、計八區に區劃し、それ〴〵の特徴を努めて數量的に叙述したことである。これまで一口に支那の農業を論じ、或は漠然と南北を分つたのとは、格段の前進である。

以上述ぶるが如くであるから、支那農業の研究はバックにより眞に一紀元を劃され、バックを卒業せずして支那農業を論ずることは、不可能となつた。勿論、調査數は未だ九牛の一毛に過ぎず地區別の如きも今後の檢討により補訂を要し、この任務は環境・農業の基本性格を等しくする我國學徒に課せられてゐるのであるが、その第一着手として先づバックの消化を必要とする。〔菊田〕

彙報

史學研究會

例會　十月十五日(土)午後一時三十分より陳列館第一教室に於いて開催、新歸朝の左記三氏を迎へてその旅行談を聞いた。來會者約五十名、頗る盛會裡に薄暮散會した。

トラック島に滯在して　泉井久之助氏

西亞細亞紀行　宮崎　市定氏

歐洲瞥見　小牧　實繁氏

右の中泉井、小牧兩氏の談話は追つて本誌に掲載の筈につき、宮崎氏の談話のみ左にその概要を記す。

西亞細亞紀行　宮崎　市定氏